

AE¶ms=35_58_7.88_N_140_37_53.37_E_type:landmark_region:JP-08&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE)

鹿島神宮

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

鹿島神宮（かしまじんぐう、**鹿嶋神宮**）は、茨城県鹿嶋市宮中にある神社。式内社（**名神大社**）、常陸国一宮。旧社格は官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。

全国にある鹿島神社の総本社。千葉県香取市の香取神宮、茨城県神栖市の息栖神社とともに東国三社の一社^[1]。また、宮中の四方拝で遍拝される一社である。

目次

- 1 概要
- 2 社名
- 3 祭神
 - 3.1 祭神について
- 4 特徴
- 5 歴史
 - 5.1 創建・伝承
 - 5.2 概史
 - 5.2.1 飛鳥時代
 - 5.2.2 奈良時代
 - 5.2.3 平安時代
 - 5.2.4 鎌倉時代から江戸時代
 - 5.2.5 明治以降
 - 5.3 神階
 - 5.4 神職
 - 5.5 社領
 - 5.6 社殿造営
- 6 境内
 - 6.1 社殿
 - 6.2 要石
 - 6.3 御手洗池
 - 6.4 鹿園
- 7 参道
- 8 摂末社
 - 8.1 摂社
 - 8.2 末社
 - 8.3 所管社
- 9 祭事
 - 9.1 式年祭
 - 9.2 年間祭事
- 10 神宝
 - 10.1 詔霊剣
 - 10.2 常陸幣
- 11 文化財
 - 11.1 国宝
 - 11.2 重要文化財(国指定)
 - 11.3 国の史跡
 - 11.4 選択無形民俗文化財(国選択)
 - 11.5 茨城県指定文化財
 - 11.6 鹿嶋市指定文化財
 - 11.7 その他
- 12 関係事項
 - 12.1 鹿島郡衙
 - 12.2 鹿島苗裔神
 - 12.3 鹿島七不思議
 - 12.4 その他
- 13 考証
 - 13.1 遺跡・古墳
 - 13.2 本源地について
 - 13.3 祭神・祭祀氏族について
- 14 現地情報
- 15 脚注
- 16 参考文献・サイト
- 17 関連文献
- 18 関連項目
- 19 外部リンク

概要

茨城県南東部、北浦と鹿島灘に挟まれた鹿島台地上に鎮座する。古くは『常陸国風土記』に鎮座が確認される東国随一の古社であり、日本神話で大国主の国譲りの際に活躍する武甕槌神（建御雷神、タケミカヅチ）を祭神とすることで知られる。古代には朝廷から蝦夷の平定神として、また藤原氏から氏神として崇敬された。その神威は中世に武家の世に移って以後も続き、歴代の武家政権からは武神として崇敬された。現在も武道では篤く信仰される神社である。

文化財のうちでは、「詔霊剣（ふつのみたまのつるぎ）」と称される長大な直刀が国宝に指定されている。また境内が国の史跡に、本殿・拝殿・楼門など社殿7棟が国の重要文化財に指定されているほか、多くの文化財を現在に伝えている。鹿を神使とすることでも知られる。

社名

神宮は常陸国鹿島郡の地に鎮座するが、その地名「カシマ」は、『常陸国風土記』^[原 1]では「香島」と記載される^[2]。風土記の中で、「香島郡」の名称は「香島の天の大神」（鹿島神宮を指す）に基づくと説明されている^[3]。「カシマ」を「鹿島」と記した初見は養老7年（723年）^[原 2]であり^[4]、8世紀初頭には「香島」から「鹿島」に改称されたと見られている^[2]。この変化の理由は史書からは明らかでないが、神宮側では神使の鹿に由来すると説明する^[5]。この「カシマ」の由来には諸説がある。主な説は次の通り。

- 「神の住所」すなわち「カスミ」とする説^[3]
- 建借間命（たけかしまのみこと）から「カシマ」を取ったとする説^[3]

建借間命（建借馬命）は、『先代旧事本紀』国造本紀^[原 3]に初代仲国造（那珂国造）として、また『常陸国風土記』^[原 4]に記述が見える人物。

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%... 2017/03/10

	
	
 鹿島神宮	
 拝殿(国の重要文化財)	
所在地	茨城県鹿嶋市宮中2306-1
位置	 北緯35度58分7.88秒 東経140度37分53.37秒 （https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_58_7.88_N_140_37_53.37_E_type:landmark_region:JP-08&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE)
主祭神	武甕槌大神
社格等	式内社(名神大) 常陸国一宮 旧官幣大社 勅祭社 別表神社
創建	(伝)初代神武天皇元年
本殿の様式	三間社流造
札所等	東国三社
例祭	9月1日
主な神事	御船祭(12年に1度) 白鳥祭(1月7日) 祭頭祭（3月9日）
地図	 鹿島神宮 50km



大鳥居

- 「船を止める杭を打つ場所」を意味する「カシシマ」とする説^[3]
- 『肥前国風土記』^[原5]に「杵島(きしま)」の由来として見える記述に基づくもの^[3]。

なお、神宮では現在社名に「島」の字を用いているが、自治体の茨城県鹿嶋市は佐賀県鹿島市との区別のため「嶋」の字が使用される。

祭神

祭神は次の1柱^[6]。

- 武甕槌大神（たけみかつちのおおかみ^[6]/たけみかつちのおおかみ^[7]）

『古事記』では「建御雷神」、『日本書紀』では「武甕槌神」と表記される^[8]。別名を「建布都神（たけふつのかみ）」や「豊布都神（とよふつのかみ）」^[8]。

祭神について

上記のように、鹿島神宮の主祭神はタケミカヅチ（武甕槌/建御雷）であるとされる。タケミカヅチの出自について、『古事記』^[原6]では、イザナギ（伊弉諾尊）がカグツチ（軻遇突智）の首を切り落とし、剣についた血が岩に飛び散って生まれた3神のうちの1神とする^[8]（日本書紀^[原7]ではここでタケミカヅチ祖のミカハヤヒが生まれたとする）。また、天孫降臨に先立つ葦原中国平定においては、アメノリフネ（天鳥船神 : 古事記）またはフツヌシ（経津主神 : 日本書紀）とともに活躍したという^[9]。その後、神武東征に際してタケミカヅチはイワレビコ（神武天皇）に神剣（フツノミタマ）を授けた^[7]。ただし『古事記』・『日本書紀』には鹿島神宮に関する言及はないため、タケミカヅチと鹿島との関係は明らかでない^[10]。

一方、『常陸国風土記』^[原1]では鹿島神宮の祭神を「香島の天の大神（かしまのあめのおおかみ）」と記し、この神は天孫の統治以前に天から下ったとし、記紀の説話に似た伝承を記す^[11]。しかしながら、風土記にもこの神がタケミカヅチであるとの言及はない^[12]。

高天の原より降く(くだり来(きた)りし大神、名(みな)を香島天の大神と称(まを)す。天にてはすなはち日の香島の宮と号(なづ)け、地(つち)にてはすなはち豊香島の宮と名づく。

— 『*常陸国風土記*』*香島郡条より抜神*（原文漢文）^[13]

神宮の祭神がタケミカヅチであると記した文献の初見は、『古語拾遺』^[原8]（807年成立）における「武甕槌神云々、今常陸国鹿島神是也」という記述である^[14]。ただし、『延喜式』(927年成立)の「春日祭祀調」^[原9]においても「鹿島坐健御賀豆智命」と見えるが、この「春日祭祀調」は春日大社の創建といわれる神護景雲2年(768年)^[注1]までさかのぼるという説がある^[15]。以上に基づき、8世紀からの蝦夷平定が進むにつれて地方神であった「香島神」に中央神話の軍神であるタケミカヅチの神格が加えられたとする説があるほか^[16]、中央の国譲り神話自体も常陸に下った「香島神」が中臣氏によって割り込まれて作られたという説がある^[17]。

神宮の祭神は、タケミカヅチが国土平定に活躍したという記紀の説話、武具を献じたという風土記の説話から、武神・軍神の性格を持つと見なされている^[18]。特に別称「タケフツ」や「トヨフツ」に関して、「フツ」という呼称は神剣のフツノミタマ（布都御魂/御霊）の名に見えるように「刀剣の鋭い様」を表す言葉とされることから、刀剣を象徴する神とする説もある^[19]。鹿島神宮が軍神であるという認識を表すものとしては、『梁塵秘抄』（平安時代末期）の「関より東の軍神、鹿島・香取・諏訪の宮」^[原10]という歌が知られる^[14]。一方、船を納めさせたという風土記の記述から航海神としての一面や^[11]、祭祀集団のト氏氏が井を掘ったという風土記の記述から農耕神としての一面の指摘もある^[15]。以上を俯瞰して、軍神・航海神・農耕神といった複合的な性格を持っていたとする説もある^[15]。

特徴

鹿島神宮は、下総国一宮の香取神宮（千葉県香取市、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_53_10.03_N_140_31_43.27_E_region:JP-12_type:landmark&title=%E4%B8%8B%E7%B7%8F%E5%9B%BD%E4%B8%80%E5%AE%AE%Ef%BC%9A%E9%A6%99%E5%8F%96%E7%A5%9E%E5%AE%AE) と古来深い関係にあり、「鹿島・香取」と並び称される一対の存在にある^[20]。

鹿島・香取の両神宮とも、古くより朝廷からの崇敬の深い神社である。その神威は、両神宮が軍神として信仰されたことが背景にある^[21]。古代の関東東部には、現在の霞ヶ浦（西浦・北浦）・印旛沼・手賀沼を含む一帯に香取海という内海が広がっており、両神宮はその入り口を扼する地勢学的重要地に鎮座する。この香取海はヤマト政権による蝦夷進出の輸送基地として機能したと見られており^[21]、両神宮はその拠点とされ、両神宮の分霊は朝廷の威を示す神として東北沿岸部の各地で祀られた（後述）。鹿島神宮の社殿が北を向くことも、蝦夷を意識しての配置といわれる^[22]。

朝廷からの重要視を示すものとしては、次に示すような事例が挙げられる。

- 神郡

鹿島・香取両神宮ではそれぞれ常陸国鹿島郡・下総国香取郡が神郡、すなわち郡全体を神領すると定められていた^[23]（令集解^[原11]や延喜式^[原12]に記載）。神郡を有した神社の例は少なく、いずれも軍事上・交通上の重要地であったとされる^[23]。

- 鹿島香取使（かしまかとりづかい）

両神宮には、毎年朝廷から勅使として鹿島使（かしまづかい）と香取使（かとりづかい）、または略して鹿島香取使の派遣があった^[23]。伊勢・近畿を除く地方の神社において、定期的な勅使派遣は両神宮のほかは宇佐神宮（6年に1度）にしかなく、毎年の派遣があった鹿島・香取両神宮は極めて異例であった^[23]。

- 「神宮」の呼称

『延喜式』神名帳（平安時代の官社一覧）では、「神宮」と表記されたのは大神宮（伊勢神宮内宮）・鹿島神宮・香取神宮の3社のみであった^[23]^[注2]。

また、藤原氏からの崇敬も特徴の1つである。鹿島には藤原氏前身の中臣氏に関する伝承が多く残るが、藤原氏祖の藤原鎌足もまた常陸との関係が深く、『常陸国風土記』^[原13]によると常陸国内には鎌足（藤原内大臣）の封戸が設けられていた。また『大鏡』（平安時代後期）^[原14]を初見として鎌足の常陸国出生説もあり^[23]、神宮境外末社の津東西社跡近くに鎮座する鎌足神社（鹿嶋市指定史跡、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_58.92_N_140_37_5.41_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%8E%8C%E8%B6%B3%E7%A5%9E%E7%A4%BE%Ef%BC%88%E8%97%A4%E5%8E%9F%E9%8E%8C%E8%B6%B3%E5%87%BA%E7%64%9F%E4%BC%9D%E6%89%BF%E5%9C%B0%Ef%BC%89))はその出生地と伝えられる^[24]。藤原氏の氏社として創建された奈良の春日大社では、鹿島神が第一殿、香取神が第二殿に勧請されて祀られ^[25]、藤原氏の祖神たる天児屋根命（第三殿）よりも上位に位置づけられた。

その後、中世に武家の世に入ってから両神宮は武神を祀る神社として武家から信仰された。現代でも武術方面から信仰は強く、道場には「鹿島大明神」・「香取大明神」と書かれた2軸の掛軸が対で掲げられることが多い。

歴史

創建・伝承

創建について、鹿島神宮の由緒『鹿島宮社例伝記』（鎌倉時代）や古文書（応永32年(1425年）の目安）では神武天皇元年に初めて宮柱を建てたといいい^[26]、神宮側ではこの神武天皇元年を創建年としている^[27]。

一方『常陸国風土記』^[原1]にも神宮の由緒が記載されており、「香島の天の大神」が高天原より香島の宮に降臨したとしている^[14]。また、この「香島の天の大神」は天の大神の社（現・鹿島神宮）、坂戸の社（現・摂社坂戸神社）、沼尾の社（現・摂社沼尾神社）の3社の総称であるとする^[14]。その後第10代崇神天皇の代には、大中臣神聞勝命（おこなかとみかむきかつ）が大坂山で鹿島神から神託を受け、天皇は武器・馬具等を献じたという^[14]。さらに第12代景行天皇の代には、中臣臣狭山命が天の大神の神託により舟3隻を奉献したといい、これが御船祭（式年大祭）の起源であるとされる^[14]。



「鹿島要石真図」江戸時代の絵巻。上に要石を祀る鹿島神宮、下が剣をもち大蛇を抑える武甕槌神。



香取神宮（千葉県香取市）下総国一宮。鹿島神宮とは深い関係にあり、古来並び称される。



鎌足神社（鹿嶋市宮中）藤原鎌足の出生伝承地。

概史

飛鳥時代

『常陸国風土記』^[原1]]には鹿島社に多くの神戸、すなわち祭祀維持のための付属の民戸が設置されたことが見える^[14]]。また風土記では、大化5年(649年)に神郡として香島郡(鹿島郡)が成立し、天智天皇年間(668年-672年)には初めて使いが遣わされて造営のことがあったと記す^[14]]。以上の背景としては大化改新後の新政による朝廷の東国経営強化が考えられ、改新を契機として朝廷は鹿島社とつながりを深め、天智朝の社殿造営を大きな画期としたと見られている^[14]]。

このような朝廷との結びつきには、中臣氏の存在が背景にあったと指摘される^[14]]。中臣氏は6世紀後半から7世紀初頭に祭祀制度の再編を行っており、これに伴って東国に中臣部やト部といった部民を定め、一地方神であった鹿島社の祭祀を掌握したと見られている^[14]]。実際、史料には鹿島郡司や社の神職に中臣姓の人物が多く存在する^[14]]。そして、大化改新後に中臣氏は政治的に躍進し、鹿島社も朝廷との関係を深めたという^[14]]。中臣氏進出以前の祭祀氏族については諸説あるが、明らかではない(「考証」節参照)。

鹿島神が朝廷の東国経営で大きな役割を果たした様子を表すものとしては、後世の『日本三代実録』^[原15]]や『延喜式』神名帳^[原16]]に記される、陸奥国内の多くの鹿島神の苗裔神(御子神)の存在が指摘される^[14]](「鹿島苗裔神」節参照)。その記載から、鹿島神は国土平定の武神・水神として太平洋沿岸部を北上し、その過程で各開拓地で祀られ、最終的に今の宮城県石巻市付近まで影響力を及ぼしたとされる^[28]]。

奈良時代

奈良時代には、史書に多数の神戸の記事が載る(「社領」節参照)。またこの時代、鹿島社は藤原氏から氏神として特に崇敬された。神護景雲2年(768年)には奈良御蓋山の地に藤原氏の氏社として春日社(現・春日大社)が創建されたとい^[注1]]、鹿島から武甕槌神(第一殿)、香取から経津主命(第二殿)、枚岡から天児屋根命(第三殿)と比売神(第四殿)が勧請された^[25]]。これら4柱のうち特に鹿島神が主神で、春日社の元々の祭祀も鹿島社の遷拝に発したと見られている^[25]]。その後も藤原氏との関係は深く、宝龜8年(777年)^[原17]]の藤原良経の病の際には「氏神」の鹿島社に対して正三位の神階が奉叙されている^[11]]。

平安時代

平安時代以降の神階としては、承和3年(836年)^[原18]]に正二位勲一等、承和6年(839年)^[原19]]に従一位勲一等の記事が見える^[14]]。嘉祥3年(850年)^[原20]]には、春日社の建御賀豆智命は正一位に達した^[14]](勧請元の鹿島社も同時に叙せられたという見方もある^[29]])。

延長5年(927年)成立の『延喜式』神名帳^[原21]]では常陸国鹿島郡に「鹿島神宮 名神大 月次新嘗」と記載されて式内社(名神大社)に列したほか、月次祭・新嘗祭では幣帛に預かっていた^[14]]。なお、同帳で当時「神宮」の称号で記されたのは、大神宮(伊勢神宮)・香取神宮と鹿島神宮の三社のみであった^[23]]。また、常陸国内では一宮に位置づけられるようになっていった^[注3]]。

鎌倉時代から江戸時代

鹿島神宮は武神を祀るため、中世の武家の世にも神威は維持され、歴代の武家政権や大名から崇敬を受けた^[14]]。源頼朝から多くの社領が寄せられたように、神宮には武家からの奉幣や所領の寄進が多く確認される^[14]]。その反面、武家による神宮神職への進出や神領侵犯も度々行われており^[14]]、頼朝により武家の鹿島氏(常陸大掾氏一族)が惣追捕使に任命されて神宮経営に入り込んだことを発端として、藤原氏の影響下からは離れていった^{[14][18]]}。室町時代には、武家政権の神領寄進に平行して在地勢力による侵犯が進み、社殿造営費用にも欠く状態であったという^[14]]。

江戸時代には江戸幕府からの崇敬を受け、慶長10年(1605年)には徳川家康により本殿(現・摂社奥宮の社殿)が造営された^[14]]。元和5年(1619年)には徳川秀忠により現在の社殿一式、寛永11年(1634年)には徳川頼房により楼門等が造営された^[14]]。

明治以降

明治維新後、明治4年(1871年)に近代社格制度において官幣大社に列した^[30]]。戦後は神社本庁の別表神社に列している。

昭和43年(1968年)には、明治維新後百年の記念として茨城県笠間市産の御影石を用いて大鳥居(二の鳥居)が建て替えられた^[31]]。昭和61年(1986年)には、境内が国の史跡に指定された^[32]]。

平成23年(2011年)3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震およびその余震により、石造の大鳥居(二の鳥居)と御手洗池の鳥居が倒壊し、境内の石灯笼64基も崩れたほか、本殿の千木も被害を受け、被害総額は1億700万円に上った^{[33][34]]}。その後、境内の杉を用いて大鳥居が再建され、平成26年(2014年)6月に竣工祭が執り行われている^[31]]。

なお平成23年度には、境内北西辺の新拝殿・社務所の建て替えに伴い、境内で初めての大規模な発掘調査が実施された。この時には奈良時代に遡る鍛冶関連を始めとする遺構・遺物のほか、時代ごとに幾度も整地がなされた様子が認められた^[35]]。

神階

- 六国史における神階奉叙の記録^[36]]
 - 宝龜8年(777年)7月16日、正三位 (『続日本紀』)^[原17]] - 表記は「鹿島社」。
 - 延暦元年(782年)5月20日、勲五等 (『続日本紀』)^[原22]] - 表記は「鹿島神」。
 - 承和3年(836年)5月9日、従二位勲一等から正二位勲一等 (『続日本後紀』)^[原18]] - 表記は「建御賀豆智命」。
 - 承和6年(839年)10月29日、従一位勲一等 (『続日本後紀』)^[原19]] - 表記は「建御加都智命」。
- 参考:奈良・春日社(春日大社)の「建御賀豆智命大神」に対する叙位^[36]]
 - 嘉祥3年(850年)9月15日、正一位 (『日本文徳天皇実録』)^[原20]]

注)当該記事では春日社の他の祭神3柱も叙せられている。後の『日本三代実録』でそれら3柱の勧請元社がこの記事の策命を継いで昇進していることから、元社と春日社は同時に叙位したとも見られている^[29]]。

神職

『常陸国風土記』^[原1]]にも見えるように、古代常陸には中臣部・ト部が多く住んでおり、神職を兼ねる者も多かったとされる^[40]]。天平18年(746年)^[原23]]には、これら当地に住む中臣部20烟・ト部5烟に「中臣鹿島連」姓が下賜されている^[14]]。以後の神宮の主な神職は、この在地の中臣鹿島氏(中臣氏)と中央の大中臣氏が担っていた。職制について延長5年(927年)成立の『延喜式』^{[原24][原25]]}では、神宮の職制は官司1人、禰宜1人、祝1人、物忌1人からなりとし、官司は従八位に準じるとしている^[14]]。

鎌倉時代に入り、源頼朝により常陸大掾氏一族の鹿島氏が惣大行事に任じられた^[11]]。それまで神職の補任権は基本的に藤原氏が担っていたが、この武家の進出によりその影響下からは離れることとなった^[11]]。

文永3年(1266年)の「諸神宮補任之記」によれば、当時の神宮の神職には大官司を筆頭として、大禰宜、物忌及びその父(千富禰宜)、惣大行事、検非違使・惣追捕使・押領使、官介・権禰宜・和田権祝・益田祝・惣申権祝・田所権祝、素主3人その他、神夫・郷長・判官など、50人は軽く超える数がいという^[11]]。

主な職は次の通り。

大官司「だいぐうじ」。神宮の最高責任者^[41]]。古くは中央の大中臣氏から補任されていたが、長元年間(1028年-1037年)から大中臣氏と中臣氏(中臣鹿島氏)が交互に務めるようになり、建長年間(1249年-1256年)以後は中臣氏が世襲した(近世に嫡氏を称する)^[14]]。

大禰宜「おおねぎ」。庶務をすべ、神体奉戴や献饌も行なった^[41]]。貞観8年(866年)には禰宜が確認され、承安年間(1171年-1175年)を大禰宜の初めとして、以後中臣氏が世襲した(近世に羽生氏を称する)^[14]]。一時期に鹿島氏(常陸大掾氏)も担っていた^[40]]。中世以後は大官司よりも多くの所領を有しており、神宮で実質的に最も実力を持った^[42]]。



春日大社(奈良県奈良市) 藤原氏の氏社。その創建に際して武甕槌神は鹿島から春日へ勧請され、その第一殿に祀られた。



「常陸 鹿嶋大神宮」 歌川広重画『六十余州名所図会』より。

鹿島神・香取神の神階推移 ^{[36][37]]}		
年	鹿島神	香取神
777年	正三位	正四位上
782年	勲五等	--
836年	従二位勲一等→正二位勲一等	従三位→正二位
839年	従一位勲一等	従一位
850年	正一位? （正一位勲一等?）	正一位?
882年	--	正一位勲一等

鹿島大官司 神職図

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）

本殿（国の重要文化財）



社殿全景
本殿後背には神木。

本殿平面图

要石

要石(かなめいし)は、境内東方に位置する霊石。古来「御座石(みまいし)」や「山の宮」ともいう^[14]。地上では直径30センチメートル・高さ7センチメートルほどで、形状は凹型^[57]。

かつて、地震は地中に棲む大鯨（おおなまず）が起こすものと考えられていたため、要石はその大鯨を押さえつける地震からの守り神として信仰された^{[58][59]}。要石は大鯨の頭と尾を抑える杭であるといい、見た目は小さいが地中部分は大きく決して抜くことはできないとい伝えられている^[58]。『水戸黄門仁徳録』によれば、水戸藩主徳川光圀が7日晩要石の周りを掘らせたが、穴は翌朝には元に戻ってしまい根元には届かなかったという^[58]。過去に神無月に起きた大地震のいくつかは、鹿島神が出雲に出向いて留守のために起きたという伝承もある^[60]。

なお、香取神宮には凸型の要石があり、同様の説話が伝えられる^[61]。この要石は「鹿島七不思議」の1つに数えられている^[57]。

鹿島神宮と地震に関しては、建久9年(1198年)の「伊勢暦」に詠み人知らずとして見える、次の地震歌が知られる^[62]。

“ ゆるぐとも よもやぬけじの 要石 鹿島の神の あらん限りは ”

また康元元年(1256年)に藤原光俊(葉室光俊)が神宮を訪れた際、要石を「石の御座(みまし)」として、次の歌を歌っている^[63]。

“ 尋ねかね 今日見つるかな 千飢破(ちはやぶる) 深山(みやま)の奥の 石のみましを ”



要石



要石の形状

御手洗池

御手洗池(みたらいいけ)は、神宮境内の東方に位置する神池。深斎(禊)の池^[57]。古くは西の一の鳥居がある大船津から舟でこの地まで進み、深斎をしてから神宮に参拝したと考えられており^[14]、「御手洗」の池名もそれに由来するとされている^[57]。

池には南崖からの湧水が流れ込み、水深は1メートルほどであるが非常に澄んでいる^[64]。この池に大人が入っても子供が入ってもその水深は乳を越えないといわれ、「鹿島七不思議」の1つに数えられている^[57]。

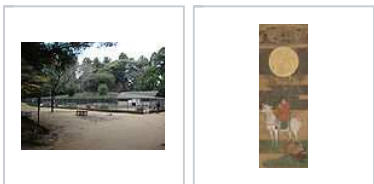


御手洗池

鹿園

境内には鹿園があり、神使(神の使い)の30数頭の日本鹿が飼育されている^[5]。

『古事記』によると、天照大神の命をタケミカヅチに伝えたのは天迦久神(あめのかくのかみ)とされる^[5]。この「カク」は「鹿兒(かこ)」すなわち鹿に由来する神とされる^[65]ことに基き、神宮では鹿を使いとするとする^[6]。また、神宮の社名が「香島」から「鹿島」に変化したことについても、神使の鹿に由来するといわれる^[3]。春日大社の創建に際しては、神景量景元年(767年)に白い神鹿の背に分霊を乗せ多くの鹿を引き連れて出発し、1年かけて奈良まで行ったと伝えられており、奈良の鹿も鹿島神宮の発祥とされている^[66]。この鹿島立の様子は、春日曼荼羅の「鹿島立神多図」でも知られる^[67]。



鹿園

鹿島立神影図
(春日大社蔵)

参道

鹿島神宮の一の鳥居は古くは東西南北に4基があったが、現在は東西南の3基である^[68]。西の一の鳥居は北浦湖畔の鹿嶋市大船津にあり、鵜川の中にある(位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B3%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%A%E¶ms=35.57_40.01_N_140.36_41.31_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E4%B8%80%E3%81%E5%A9%B3%A5%E5%B1%85%E7%BC%88%E8%A5%BF%E7%BC%89))^[68]。古くから大船津は神宮参拝者の船着場であったため^[69]、神宮の門前町もこちらの西方側に広がっている。中世にこれらの町が形成される以前は、大船津の東西南北から舟で御手洗池まで進み、そこで着岸して参宮しと考へられている^[74]。現在の鳥居は平成25年(2013年)6月の再建で、昭和期に堤防整備により水上から陸上に移っていたが、平成26年(2014年)の御船祭に向けて改めて水上に建て替えられたものである^[68]。この鳥居は川底から高さ18.5メートル、幅22.5メートルという大規模なもので水上鳥居としては日本最大級である^[68]。御船祭の際にはここから御船が出発する。

東の一の鳥居は太平洋に面する明石の浜にある(位置 [https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=E9%8B%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_59_43.34_N_140_39_22.91_E_region:JP-08_type:landmark&title=E4%B8%80%E3%81%AE%E9%B3%A5%E5%B1%85%E6%BC%88%E6%9D%B1%E6%BC%89\)\)](https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=E9%8B%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_59_43.34_N_140_39_22.91_E_region:JP-08_type:landmark&title=E4%B8%80%E3%81%AE%E9%B3%A5%E5%B1%85%E6%BC%88%E6%9D%B1%E6%BC%89)))^[68]。伝承では、武甕槌・経津主両神はこの明石の浜に上陸し、経津主神は沼尾から望まれる香取へ、武甕槌神は沼尾から現在の本宮へと移ったという^[70]。

そのほか、南の一の鳥居は古くは神栖市日川にあったが、現在では息栖神社の一の鳥居が代用されている(位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B3%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_53_5.94_N_140_37_19.29_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E4%B8%80%E3%81%AE%E9%B3%A5%E5%B1%82%E3%BC%88%E5%E8%D9%E7%BC%96%E6%81%AF%E6%A0%96%E7%A5%9E%E7%A4%BE%E4%B8%80%E3%81%AE%E9%B3%A5%E5%B1%85%E3%62%29%64%BB%A3%E7%94%AE%8F%BC%89))[⁶⁸。北の一の鳥居は神戸県に立っていたが、現在はない。^[68]



西の一の鳥居(鹿嶋市大船津)
鰯川(北浦)の川辺。



東の一の鳥居（鹿嶋市神向寺）
太平洋に面する。

南の一の鳥居（神栖市息栖）
息栖神社一の鳥居を代用。

摂末社

摂末社・所管社は、摂社7社（境内3社、境外4社）・末社15社（境内8社、境外7社）・所管社1社（境内1社）の計23社^[71]。

摂社

奥宮

- 祭神: 武甕槌大神荒魂

「おくのみや」。本宮社殿からさらに参道を進んだ先に、本宮本殿同様に北面して鎮座する境内摂社（位置（https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_58_12.57_N_140_38_06.79_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%86%85%E6%91%82%E7%A4%BE%EF%BC%9A%E5%A5%E5%AE%AE%））。『吾妻鏡』^[原 33]では仁治2年（1241年）の火災で「不開御殿奥御殿等は焼かず」という記録があり、この「不開御殿（あかずのごてん）」は本殿、「奥御殿」は奥宮を指すとして鎌倉時代にはすでに奥宮が存在したと見られている^{[72][14]}。現在の社殿は、江戸時代初期の慶長10年（1605年）徳川家康により関ヶ原戦勝時の御礼として建てられた本宮の旧本殿である^[73]。元和5年（1619年）の造替により現在地に移され奥宮本殿とされた^[73]。構造は三間社流造で一間の向拝を付するが、のちの修理の際に現本殿に倣って改造が施されたと見られている^[73]。総白木作りの簡素な意匠であるが、彫刻には桃山時代の大胆な気風も見える^[73]。境内の社殿では最も古く、国の重要文化財に指定されている^[73]。



奥宮（国の重要文化財）

高房神社

- 祭神: 建葉槌神

「たかふさじんじゃ」。本宮の社殿正面に鎮座する境内摂社（位置（https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_58_09.12_N_140_37_53.29_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%86%85%E6%91%82%E7%A4%BE%EF%BC%9A%E9%AB%98%E6%88%BF%E7%A5%9E%E7%A4%BE%））。本殿に詣でる前に参拝するのが古例とされる^[74]。祭神は、『日本書紀』によれば天香香背男討伐において武甕槌神によって派遣され活躍したといい、静神社（常陸国二宮）では主祭神として祀られている。現在の社殿は元和5年（1619年）の本殿造替とともに造営されたと伝える^[74]。この神社は、鎮座位置や祭神の関係から摂社のうちでもかなり古い存在と考えられている^[75]。



高房神社

三笠神社

- 祭神: 三笠神

「みかさじんじゃ」。本殿の東脇に鎮座する境内摂社（位置（https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_58_07.43_N_140_37_54.52_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%86%85%E6%91%82%E7%A4%BE%EF%BC%9A%E4%B8%89%E7%AC%A0%E7%A5%9E%E7%A4%BE%））。三笠神社の由来は祭神も含めて古来定かでない^[75]。神宮側では、当地を「三笠山」と称することから地主神と推察している^[76]。この「三笠山」の呼称に関しては、奈良の三笠山（御蓋山）との関係性が指摘される^[76]。



三笠神社

跡宮

- 鎮座地: 鹿嶋市神野（かの）（位置（https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_25.33_N_140_37_24.88_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%91%82%E7%A4%BE%EF%BC%9A%E8%B7%A1%E5%AE%AE%））
- 祭神: 武甕槌大神荒魂

「あとのみや」。境外摂社。社名は「荒祭宮」とも。古くは祭神は大曲津命（おおまがつのみこと）とされていた^[10]。鹿島神の最初の降臨地と伝えられ、奈良春日への勧請の際に武甕槌神はここから出発したという^[76]。かつて跡宮の傍らには、神宮の祭祀を司る女性斎主（物忌）が住む「物忌館（ものみやかた）」があった^{[76][14]}。



跡宮（鹿嶋市神野）

坂戸神社

- 鎮座地: 鹿嶋市山之上（位置（https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_59_12.87_N_140_37_32.46_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%91%82%E7%A4%BE%EF%BC%9A%E5%9D%82%E6%88%B8%E7%A5%9E%E7%A4%BE%））
- 祭神: 天児屋命

「さかとじんじゃ」。境外摂社。『常陸国風土記』^[原 1]には本宮・沼尾神社と坂戸神社の三社をもって「香島天大神」と総称されたと見える^[14]。祭神は『常陸国風土記』に記載のある大巾神聞勝命の祖神で、中臣氏・藤原氏の氏神である^[77]。本殿は平入り、拝殿は妻入り^[78]。社殿は東面しており、東一の鳥居（明石の浜）と正対するのは坂戸神社であるという指摘がある^[10]。坂戸神社境内は国の史跡に指定されている（本宮境内に包括）^[32]。なお、本宮境内には坂戸神社の遙拝所がある。



坂戸神社（鹿嶋市山之上）

沼尾神社

- 鎮座地: 鹿嶋市沼尾（位置（https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=36_00_03.55_N_140_37_25.17_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%91%82%E7%A4%BE%EF%BC%9A%E6%B2%BC%E5%B0%BE%E7%A5%9E%E7%A4%BE%））
- 祭神: 経津主神

「ぬまおじんじゃ」。境外摂社。『常陸国風土記』^[原 1]には本宮・坂戸神社と沼尾神社の三社をもって「香島天大神」と総称されたと見える^[14]。祭神は香取神宮の主祭神で、武甕槌神とともに東国を開いたとされる。伝承では、武甕槌・経津主両神は明石の浜に上陸し、経津主神はここから香取へ、武甕槌神は現在の本宮へと移ったという^[70]。沼尾神社のかつての本殿は元和5年（1619年）の造替で奥宮から移されたものであったが^[79]、現在の本殿は昭和28年（1953年）の改築によるもので、拝殿は妻入り^[80]。境内後方には風土記にある「沼尾池」の面影が残っている^[80]（江戸期にはすでに枯沼^[10]）。後述（「考証」節）のように、この沼尾池並びに沼尾神社が鹿島神の本源とする説もある^[14]。沼尾神社境内は国の史跡に指定されている（本宮境内に包括）^[32]。なお、本宮境内には沼尾神社の遙拝所がある。



沼尾神社（鹿嶋市沼尾）

息栖神社

- 鎮座地: 神栖市息栖（位置（https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_53_8.94_N_140_37_30.48_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%91%82%E7%A4%BE%EF%BC%9A%E6%81%AF%E6%A0%96%E7%A5%9E%E7%A4%BE%））

- 祭神**: 岐神、天鳥船命、住吉三神
- 社格**: 国史見在社、旧県社、東国三社

「いきすじんじや」。境外摂社。岐神は東国開拓の際に武甕槌大神を出雲から東国へ、天鳥船神は国譲りの際に武甕槌大神を出雲へそれぞれ先導した神と伝える^[81]。「息栖」とは「沖洲（おきす）」の転訛、すなわち香取海に浮かぶ沖洲に祀られていたことに由来するとされる^[82]（詳細は「息栖神社」を参照）。

末社

境内社

- 須賀社（すかのやしろ） - 祭神: 素戔鳴命
- 津東西社（つのとうざいのやしろ） - 祭神: 高麗神・間麗神

古くは「アイロコイロの社」と呼ばれた^[83]。元は鹿嶋市大船津に位置する境外社で、跡地に石碑を残す（位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_54.56_N_140_37_07.12_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E7%B7%A1))。

- 祝詞社（のりとのやしろ） - 祭神: 太玉命
- 熊野社（くまののやしろ） - 祭神: 伊弉諾命・事解男命・早玉男命
- 稲荷社（いなりのやしろ） - 祭神: 保食神
- 熱田社（あつたのやしろ） - 祭神: 素戔鳴命・稲田姫命
- 御厨社（みくりやのやしろ） - 祭神: 御食津神
- 大黒社（だいくのやしろ） - 祭神: 大国主命

境外社

- 年社（としのやしろ、鹿嶋市宮下、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_58_17.02_N_140_37_41.10_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E7%BC%9A%E5%B9%B4%E7%A4%BE)) - 祭神: 大年神
- 潮社（いたのやしろ、鹿嶋市下津、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_58_24.72_N_140_38_43.76_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E7%BC%9A%E6%BD%AE%E7%A4%BE)) - 祭神: 高倉下神
- 阿津社（あつのやしろ、鹿嶋市鉢形、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_55.33_N_140_38_52.74_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E7%BC%9A%E9%98%BF%E6%B4%A5%E7%A4%BE)) - 祭神: 活津彦根
- 国主社（くぬしのやしろ、鹿嶋市宮中、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_45.20_N_140_37_36.60_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E7%BC%9A%E5%9B%BD%E4%B8%BB%E7%A4%BE)) - 祭神: 大国主命
- 海辺社（うべのやしろ、鹿嶋市神野、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_43.54_N_140_37_28.37_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E7%BC%9A%E6%B5%B7%E8%BE%BA%E7%A4%BE)) - 祭神: 蛭子命
- 押手社（おしでのやしろ、鹿嶋市城山、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_53.09_N_140_37_22.93_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E7%BC%9A%E6%8A%9C%E6%89%8B%E7%A4%BE)) - 祭神: 押手神
- 鷲宮（わしのみや、鹿嶋市神野、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_22.42_N_140_37_27.48_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A2%83%E5%A4%96%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E7%BC%9A%E9%B7%B2%E5%AE%AE)) - 祭神: 天日鷲命

所管社

- 祖霊社

氏子区内の戦没者を中心に物故者3,100余柱を祀る^[84]。東京成蹊学園内の鹿島神社社殿を昭和21年(1946年)に移築し、昭和22年(1947年)6月に鎮座した^[84]。

祭事

式年祭

式年大祭として、御船祭（みふねさい）が12年に1度の午年に行われる^[85]。御船祭は応神天皇の時代に祭典化されたと伝えられ^[86]、神宮における最大の祭典とされている^[87]。祭は戦国時代に中絶したが、明治3年(1870年)に再興された^{[14][88]}。

祭事の流れは次の通り^{[87][86]}。

- 9月1日午前、天皇から遣わされる勅使の参向を仰いで例大祭を執行。
- 2日早朝、鹿島神宮を進発した神輿は陸路を北浦湖岸の大船津に到着。大船津で神輿が龍頭の飾り等を施した御座船（ござぶね）に載せられ、多くの供奉船を従えて水上渡御し、香取市加藤洲に至る。そこで香取神宮の御迎祭を受けた後、再び同じ水路を還幸して行宮に戻る。
- 3日午後、行宮から本殿へと還幸。

年間祭事

	年間祭事一覧	[表示]
--	--------	----------------------------------

白馬祭

「おうめさい」。1月7日、中祭。かつて神宮では、元旦から6日まで祭神は眠っているとして祭事を控え、祭神の目覚める1月7日に物忌によって不開御殿（本殿）を開ける「御戸開き神事」が行われた^[90]。その際邪気祓いのため白馬が静かに曳き廻されたが、次第に御戸開きの鍵の音が聞こえないよう荒々しく廻すようになったという^[90]。現在では御戸開き神事は行われないが、代わりに「白馬祭」として、東神門から楼門まで白馬で駆け抜ける神事が行われる^[90]。

祭頭祭

「さいとうさい」。3月9日、大祭。天武天皇の頃に始まると伝え、防人が鹿島立をする際の姿を再現したものであるという^[26]。祭は神宮の南北66郷（現在は北郷24、南郷26）から卜定で選ばれた2郷が神宮に奉仕を行う^[6]。5歳位の新発意（しばち）を先頭に立てた色鮮やかな集団により、神前まで祭頭ばやしが行われる^[91]。祭は国の選択無形民俗文化財に選択されている^[91]。

なお、鹿島神宮の祭祀は古くは伊勢神宮同様に庭上祭祀であり、明治以降に殿上祭祀に改められている^[26]。

神宝

鹿島神宮の中でも極めて重視される神宝2例について紹介する。その他の主な神宝については、「文化財」節を参照。

御霊剣

御霊剣（ふつのみたまのつるぎ）は、神宮に伝えられている神剣^[93]。別称が「平国剣（くにむけのつるぎ）」^[94]。国宝に指定されており、指定名称は「直刀・黒漆平文大刀拵（ちよくとう・くろうるしひょうもんたちごしらえ）附 刀唐櫃」^[95]。古くより神宝として本殿内陣で秘められていた^[95]。

長大な直刀で、柄(つか)・鞘を含めた全長は2.71メートル、刃長は2.24メートルを測る。制作年代は定かでないが、刀身は奈良時代から平安時代、拵えは平安時代の作と見られている^[95]。現存する伝世品(出土品でない)の日本刀の中では古例の1つであり、また刃長の点では最大の作品とされる。長大な刀身を作るために、途中4か所で刀身を繋ぎ合わせるという極めて珍しい手法を使っていることが判明しており、技術的にも貴重な存在である。外装(柄・鞘)は、黒漆塗りの上に平文(ひょうもん、金銀などの薄板を貼って文様を表す技法)や金銅透かし彫りの金具で装飾を施した古様な技法によるもので、正倉院の「金銀細荘唐大刀」の流れを汲むものとされる。

フツノミタマは『古事記』『日本書紀』でも「師霊剣」や「布都御魂剣」等として言及があり、神武天皇に際してタケミカヅチから高倉下を通じてイワレビコ(神武天皇)に下された神剣としている。この剣は、神武天皇即位後に宮中に祀られ、のち崇神天皇の御世に石上神宮(奈良県天理市)に遷され祀られたとされる^[96]。鹿島神宮に伝わるフツノミタマは、上記のように初代フツノミタマがついに鹿島神の元に帰ることはなかったので、後世に改めて作られたものだという^[97]。作刀に関しては、『常陸国風土記』^[原 1]にある砂鉄から剣を作ったという記述との関連も指摘される^[95]。

常陸帯

常陸帯(ひたちおび)は、神宮に伝わる神宝^[98]。神功皇后が三韓征伐での鹿島神の守護に感謝して奉納した腹帯であるとされる^[99]。古くより本殿深く箱の中に納められており、現在も見ることはいできない^[98]。

この伝承に基づき、かつて1月14日には「常陸帯神事」が行われていた^[14]。祭事では、男女の名を記した帯の先を神前に供え、神主がそれを結び合わせ結婚が占われたという^[10]。『源氏物語』竹河の巻や『古今和歌六帖』にも記載が見え^[14]、その平安時代当時においてもすでに古い習俗と見なされている^[10]。その後、この祭事は妊婦に腹帯を授ける安産信仰に変化していった^[14]。

文化財

国宝

- 直刀・黒漆平文大刀拵(ちよくとう・くろうるしひょうもんたちごしらえ)(附 刀唐櫃)(工芸品)

通称「師霊剣」。昭和30年6月22日指定^[95]。

重要文化財(国指定)

- 本殿、石の間、拝殿、幣殿 4棟(附 棟札2枚)(建造物) - 本殿は明治34年3月27日指定、他3棟は明治44年4月17日指定^{[50][注 5]}。
- 摂社奥宮本殿(附 棟札1枚)(建造物) - 明治34年3月27日指定^{[100][73]}。
- 楼門(建造物) - 昭和41年6月11日指定^[54]。
- 仮殿(建造物) - 昭和51年5月20日指定^[53]。
- 梅竹蒔絵鞍(附 四手蒔絵居木一双)(工芸品)

鎌倉時代の作で、蒔絵の和鞍の中で最古のものである。社伝では『吾妻鏡』建久2年(1191年)の記事^[原 34]にある源頼朝寄進の軍陣鞍とするが^[101]、通常の軍陣鞍とは様式が異なっており、祭事に使用したものと推測されている。昭和34年6月27日指定^[102]。

国の史跡

- 鹿島神宮境内 附 郡家跡 - 指定対象は次の4か所。昭和61年8月4日指定、平成元年・11年・13年・17年・20年に追加指定^[32]。
 - 鹿島神宮境内
 - 摂社坂戸神社境内
 - 摂社沼尾神社境内
 - 鹿島郡家跡

選択無形民俗文化財(国選択)

- 鹿島の祭頭祭 - 昭和51年12月25日選択^[91]。

茨城県指定文化財

- 有形文化財
 - 木造狛犬 2躯(彫刻)

江戸時代初期、元和5年(1619年)の作。寄せ木造り、漆箔で、高さは阿型が77.3センチメートル、吡型が80.3センチメートル。昭和33年7月23日指定^[103]。

- 木造狛犬 2躯(彫刻)

鎌倉時代の作。寄せ木造り、漆箔で、高さは各72センチメートル。昭和40年2月24日指定^[104]。

- 黒漆螺鈿蒔絵台 1基(工芸品)

鎌倉時代末期。昭和33年7月23日指定^[105]。

- 銅印 1顆(工芸品)

平安時代の作で、印文は「申田宅印」。「申田」の意味には「神田」という説と「神璽」という説がある。暦応4(1341年)を初見として、古文書に押印された例が見える。昭和33年7月23日指定^[106]。

- 陶製狛犬 3躯(工芸品)

室町時代の作と見られる。昭和33年7月23日指定^[107]。

- 石造燈籠 1基(工芸品)

江戸時代初期、元和5年(1619年)の作。搭高256センチメートル。昭和33年7月23日指定^[108]。

- 鏡 1口(工芸品)

平安時代前半の作の三鈔鏡。昭和33年7月23日指定^[109]。

- 軍配 1口(工芸品)

室町時代の作。昭和33年7月23日指定^[110]。

- 太刀 銘景安 1口(工芸品)

平安時代末期、備前刀工(古備前派)の景安の作と見られる。初代水戸藩主の徳川頼房の寄進による。身長は77.5センチメートル。昭和36年3月24日指定^[111]。

- 草花双鳥円鏡 1面(工芸品)

室町時代の作。昭和45年(1970年)に盗難に遭った(未発見)。昭和40年2月24日指定^[112]。



石上神宮(奈良県天理市)
武甕槌神から神武天皇に授けられた師霊剣を祀る。鹿島神宮側では、これを初代とする^[92]。



石造燈籠(茨城県指定文化財)



境内の社叢
(茨城県指定天然記念物)

- 十一面観音御正体 1面（工芸品）

鎌倉時代初期の作。昭和45年（1970年）に盗難に遭った（未発見）。東南に昭和40年2月24日指定^[113]。

- 鹿島神宮文書 18巻（古文書）

元暦2年（1185年）の源頼朝下文から明治4年（1871年）の神祇官達書に至る、総計250点の古文書群。卷子で18巻に仕立られている。平成22年11月10日指定^[114]。

- 天然記念物
 - 鹿島神宮樹叢 - 昭和38年8月23日指定^[47]。

鹿嶋市指定文化財

- 有形文化財
 - 楼門回廊 2棟（建造物） - 昭和57年3月20日指定。

また、神幸祭で奉納される各地区の山車数台が鹿嶋市指定有形文化財に指定されている。

その他

- 悪路王の首像・首桶

蝦夷の悪路王の首と首桶を、江戸時代の寛文4年（1664年）に木造で復元し奥州の藤原満清が奉献したもの。悪路王とは、平安時代に坂上田村麻呂が征伐した蝦夷指導者のアテルイを指すとしている。

- 美しい日本の歩きたくなるみち500選選定「鹿島神宮の森からカシマスタジアムを巡るみち」

関係事項

鹿島郡衙

鹿島郡（香島郡）は、『常陸国風土記』^[原 1]によれば下総国の海上国造の部内及び那賀国造の部内からそれぞれ割き、当初より神郡として建郡されたという^[3]。古郡衙の遺構は見つかっておらず^[3]、神郡の郡衙であるので神社のそばであるとも推察される^[10]。

8世紀以降の新郡衙跡は、神宮の南約1.5kmに位置する鹿嶋市宮中の神野向遺跡（かのむかいいいせき、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))）で発見された。遺構は、8世紀前半から10世紀初め頃までの郡庁内郭・厨家相当施設・正倉院等で構成されている。この場所は『常陸国風土記』^[原 1]の「其の社の南」に郡家があるという記載とも一致する。遺跡は鹿島神宮境内の附（つかけたり）として国の史跡に指定されている^{[115][32]}。

鹿島苗裔神

鹿島神宮は東国開拓の拠点であったことから、その苗裔神（びょうえいしん）すなわち御子神が各地に形成された^[28]。『常陸国風土記』^[原 4]の時期には、すでに行方郡に分祠の存在が記されている^[28]。

『日本三代実録』の貞観8年（866年）の記事^[原 15]では、神宮司の言として陸奥国に苗裔神が38社あると記載されている^[28]。その内訳は次に示す通りであるが、具体的な社名は記されていない^[43]。

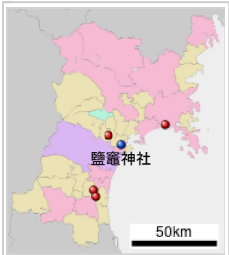
菊多郡 1、磐城郡 11、標葉郡 2、行方郡 1、芋多郡 7、伊具郡 1、日理郡 2、宮城郡 3、黒河郡 1、色麻郡 3、志太郡 1、小田郡 4、牡鹿郡 1

また同記事では、陸奥国での鹿島神の崇りが基だしいので嘉祥元年（848年）に宮司らが奉幣に向かったが、陸奥国入国は許されなかったという^[43]。これに関して、神宮の祭祀氏族が代わったため分社側が抵抗したと解釈する説がある^[43]。

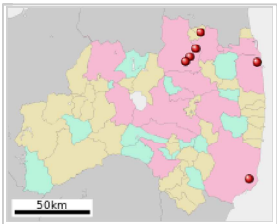
さらに『延喜式』神名帳^[原 16]では、陸奥国条に「鹿島」を冠する神社として次の8社の記載がある（「陸奥国の式内社一覧」参照）。



神野向遺跡（鹿嶋市宮中）



鹿島苗裔神の分布（宮城県域、論社含む）



鹿島苗裔神の分布（福島県域、論社含む）

延喜式				
郡名	社名	社名	所在地	
黒川郡	鹿島天足別神社	鹿島天足別神社	宮城県黒川郡富谷町大亀	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
日理郡	鹿島伊都乃比気神社	(論) 鹿島緒名太神社	宮城県亘理郡亘理町逢隈小山	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
		(論) 鹿島天足和気神社	宮城県亘理郡亘理町逢隈鹿島	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
日理郡	鹿島緒名太神社	(論) 鹿島緒名太神社	宮城県亘理郡亘理町逢隈小山	(前記)
		(論) 鹿島天足和気神社	宮城県亘理郡亘理町逢隈鹿島	(前記)
日理郡	鹿島天足和気神社	(論) 鹿島天足和気神社	宮城県亘理郡亘理町逢隈鹿島	(前記)
信夫郡	鹿島神社	(論) 鹿島神社	福島県福島市鳥谷野	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
		(論) 鹿島神社	福島県福島市小田	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
		(論) 鹿島神社	福島県福島市岡島	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
		(論) 鹿島神社	福島県伊達郡国見町	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
磐城郡	鹿島神社	鹿島神社	福島県いわき市常磐上矢田町	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
牡鹿郡	鹿島御児神社	鹿島御児神社	宮城県石巻市日和が丘	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))
行方郡	鹿島御子神社	鹿島御子神社	福島県南相馬市鹿島区鹿島	位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE&params=35_57_19.29_N_140_38_01.67_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E9%83%A1%E5%AE%B6%E8%B7%A1%E7%BC%88%E7%A5%9E%E9%87%8E%E5%90%91%E9%81%BA%E8%B7%A1%E7%BC%89))

以上の記載から、鹿島神が海岸沿い（北）上にて牡鹿郡（現・宮城県石巻市付近）まで進出した様子が見える^[28]。またその社名から、鹿島神の御子神として「天足別命」の存在も推測される^[116]。『延喜式』社名帳¹⁶⁾では香取神宮の苗苅神2社も見えるが^[117]、これら鹿島・香取苗苅神の存在は、大和朝廷の勢力が海岸沿いに北進する際に鹿島・香取両神の神威を仰いだことによると解釈されている^[28]。これに関連する事象として、陸奥国一宮の鹽竈神社（宮城県塩竈市、位置（https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%A¶ms=38_19_08_12_N_141_00_45.47_E_region:JP-04_type:landmark&title=%E9%99%B9%E5%A5%A5%E5%9B%9D%E4%B8%80%E5%AE%AE%E7%BC%9A%E6%B9%BD%E7%A6%B8%E7%A5%9E%E7%A4%B6%E7%BC%88%E6%AD%A6%E7%94%95%E6%A7%8C%E3%68%BB%E7%B3%6C%E6%B4%A5%E4%B8%BB%E4%B8%A1%E7%A5%9E%E3%82%92%E5%90%88%E7%A5%80%E7%BC%89））においても武甕槌・経津主両神が祀られている^[28]。なお、鹿島・香取の分布には差があり、香取苗苅神2社は鹿島を飛び越す位置に鎮座する^[118]。このことから、初期段階には鹿島は外海（蝦夷）、香取は内海（香取海）を志向したとし、その後両神の神威が逆転したとする説がある^[118]。

そのほか、後世には武神としての崇敬により各地に鹿島神が勧請され、旧常陸国地域を中心として全国に多くの分祠が形成された^[26]（詳しくは「鹿島神社」を参照）。



鹿島緒名太神社(宮
県亘理郡亘理町)

鹿島天足和氣神社(宮
城県亘理郡亘理町)

鹿島御児神社(宮城県
石巻市)

鹿島御子神社(福島県南相馬市)

鹽竈神社(宮城県塩竈市)

鹿島七不思議

鹿島神宮には「七不思議」と呼ばれるものがあり、次の7項目が挙げられる^[14]。

- 要石
- 御手洗池の水深
- 末無川 - 境外の高天原で湧出した水の行方が辿れなくなるという^[119]。
- 境内三笠山の藤の花 - 藤の多く咲く年は豊作、少ない年は凶作という^[119]。
- 鹿島灘の海鳴 - (特に奥宮付近において) 波の音が北の方に聞こえる時は晴れ、南に響く時は雨が降るという^[119]。
- 根上りの松 - 神宮の松は幾度伐っても芽が出て枯れないという^[119]。
- 松の簀 - 神宮の松で作った簀からは脂が出ないという^[119]。

その他

鹿島神宮寺

「かしまじんぐうじ」。かつて存在した鹿島神宮の神宮寺。

嘉祥3年(850年)^[原35]・天安3年(859年)^[原36]の太政官符によると、天平勝宝年間(749年-757年)に鹿島郡大領・中臣連千徳、元宮司・中臣鹿島連大宗(たいそう)、修行僧・満願らにより創建されたといひ、承和4年(837年)には定額寺に列せられたといふ^[14]。南北朝時代には別当寺として神宮に深く関与した^[14]。

寺はたびたび移転して江戸時代には新町にあったといい、真言宗仁和寺の末寺として「鹿島山」を山号とし、釈迦如来を本尊とした^[11]。門徒寺を100近く有する有力寺院であったが、幕末になり文久3年(1863年)に戸戸天狗党によって、また元治元年(1864年)には正義隊によって荒廃、明治元年(1868年)10月に廃寺となった^[120]。このほか、神宮関係の寺では広徳寺・護国院・正等寺・普濟寺・安居寺・根本寺・涼泉寺・五台院等があったが、これらのうち護国院のみ現存している^[26]。

このほか、神宮関係の寺では広徳寺・護国院・正等寺・普濟寺・安居寺・根本寺・涼泉寺・五台院等があったが、これらのうちで護国院のみ現存している^[26]。

鹿島立

「かしまだち」。「旅立ち」や「門出」を意味する名詞で^[121]、鹿島神宮に由来するとされる。鹿島神が国土を平定したことからも、防人・武士が旅立ちで無事を鹿島神宮に祈願したことからもいわれる^[121]。

関連して、防人が鹿島神に祈った歌として『万葉集』の次の歌^[原 37]が知られる^[14]。

天平勝宝7年2月、相替遣筑紫諸国防人等歌

霰降り 鹿島の神を 祈りつつ 皇御軍に 我れは来にしを
あられふりかしまのかみをいのりつつ すめらみくさにわれはきにしを

—大舍人部千文、『万葉集』卷20 4370番

鹿島使

「かしまづかい」。鹿島神宮に遣わされた奉幣使^[122]。2月に行われる春日祭(春日大社例祭)や藤原氏関連の重要な人事に際し朝廷から発遣された^[14]。

延喜13年(913年)を初見として、藤氏長者から勸学院学生が任命され内蔵学生を添えて遣わされた^[14]。王朝衰退とともに長寛元年(1163年)に国司代の大掾氏からの鹿島大使役(かしまおおづかいやく)に代わり、毎年7月中旬に参向があった^{[14][122]}。これは応永年間(1394年-1428年)まで続き、その後は断続的に文亀3年(1503年)まで続いた^[122]。

考証

遺跡・古墳

鹿島周辺では多くの縄文時代遺跡は見つかっているが、弥生時代の遺跡は数箇所程度にとどまっている^[123]。古墳時代に入っても古い古墳は見つかっておらず、神宮境内における祭祀遺物でも、発掘された土器は6世紀以降のものとされている^[23]。

神宮に関する古墳としては、北東方2キロメートルにおいて前方後円墳17基を含む古墳100基以上^[124]からなる宮中野古墳群(きゅうちゅうのこふんぐん)が知られる。同古墳群は6世紀から7世紀頃の築造とされ、中でも婦孺塚古墳(鹿嶋市指定史跡、位置(https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%A9%B9%BF%E5%A3%B6%E7%B5%A5%9E%E5%A6%AE¶ms=35_58_56.39_N_140_36_41.41_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A4%A6%E5%A9%A6%E5%A1%9A%E5%8F%A4%E5%A2%B3%EF%BC%88%E5%A6%AE%E6%A4%B8%AD%E9%78%7B%E5%8F%A4%E5%A2%B3%EF%7B%E4%A6%F0%BC%89))は、古墳群中最大規模の墳丘長約108メートルの前方後円墳である^[124]。その他 주요古墳には、帆立貝式前方後円墳の大塚古墳(勅使塚)もある。この古墳群は鹿島地方の首長墓群と見られており^[124]、鹿島神社との関係も指摘されている^[125]。

また、神宮の東方の高天原には「鬼塚」という全長80メートルの古墳があるほか^[126]、潮来市大生にある大生古墳群も鹿島神宮との関係が指摘される^[43]。

本源地について

鹿島神宮は要衝に位置しており、ヤマト政権の東国支配の拠点のため、かなり早い段階でその勢力下に入ったとされる^[45]。『常陸国風土記』^{〔原1〕}によれば、鹿島神宮は「香島の天の大神」と記され、次の三社の総称であるという^[10]。

- 天の大神の社(あめのおおかみのやしろ) - 現在の鹿島神宮(本宮)。
- 坂戸の社(さかとんのやしろ) - 現在の境外摂社坂戸神社。
- 沼尾の社(ぬまおのやしろ) - 現在の境外摂社沼尾神社。

このように古くは三社から成る神社であったとされ、『常陸国風土記』^[原1]には景行天皇年間に舟3隻を奉獻したという記述(御船祭起源説話)もある^[10]。



夫婦塚古墳(鹿嶋市宮中)
宮中野古墳群で最大規模の古墳で、6世紀中-後半頃の築造。



鹿嶋市田谷の風景
沼尾池の跡地周辺。

これら三社のうち、本源地を「天の大神の社」以外に取る説が古くより提唱されている。沼尾社を本源とする説によると、かつて付近にあった「沼尾池」を神として祀っていたと推測される^{[14]]^[10]]}。その根拠として、『常陸国風土記』^[原 1]]で沼尾池を「天から流れてきた水がたまった沼」という表現があり、天から降った神であろうと見られている^{[14]]^[10]]}。これに対して坂戸社とする説の根拠には、『常陸国風土記』における「坂戸・沼尾」という書き順や、神社近くにあるべき古郡衙が坂戸社の鎮座する「山之上」に推定されることが挙げられる^[10]]。この中で社名「坂戸」の意味について、「さか」を「境」と見て、「蝦夷地への境界・入り口」を意味するとの指摘がある^[10]]。

祭神・祭祀氏族について

鹿島神宮の祭祀氏族としては、中臣氏が知られている。史書に見える頃からすでに中臣氏が活躍を見せており、中臣氏から出た藤原氏も氏神として神宮を崇敬した。中臣氏が神宮を管掌するようになったのは、朝廷の東国経営強化の要請から中央祭祀を司る中臣氏が祀官を再編したためとも^[4]]、原始祭祀氏族の没落によるためともいわれる^[23]]。その掌握時期についても、藤原鎌足（614年-669年）の常陸国封戸獲得の時点とする説^[23]]、中臣鹿島賜姓の時点（746年）とする説がある^[43]]。中臣氏掌握以前の祭祀氏族に関しては、次の説がある。

多氏説

中臣氏以前の氏族を多氏（おおうじ）に見る説で、根拠として、「鹿島の本宮」ともいわれる大生神社（潮来市大生、位置 (https://tools.wmflabs.org/geohack/geohack.php?language=ja&pagename=%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E5%AE%AE¶ms=35_59_30.54_N_140_33_06.43_E_region:JP-08_type:landmark&title=%E5%A4%A7%E7%94%9F%E7%A5%9E%E7%A4%B%E%EF%BC%88%E7%A7%B0+%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E6%9C%AC%E5%AE%AE%EF%BC%89) の存在がある^[43]]。その社名「おおう」は、多氏一族が居住したことによると伝えられ、奈良の多神社（多氏本拠地）からの勧請という伝承もある。また大生神社の例祭には鹿島神宮から物忌が出興したとされるが、物忌は神宮祭事のうち年6回しか携わることはなく（神職節）、その1つを境外の大生神社が占めていたことは破格の扱いといえる^{[43]]^[127]]}。大生神社に関する古文書には、春日大社創建を契機として鹿島神宮が性格を変えたこと、それに大生神社が関わっていることが記載されている^[43]]。この大生神社周辺には古墳時代中期（5世紀）の古墳群（大生古墳群）が残っており、神社祭祀氏族の墓とされ^[128]]、各前方後円墳がいずれも大生神社または鹿島神宮を向いているという指摘もある^[43]]。多氏については、鹿島郡を割く以前の那珂地域を治めた仲国造や、鹿島苗裔神が特に多い陸奥国磐城郡の国造（道奥石城国造）が、いずれも多氏祖の神八井耳命系であったことも併せて指摘される^[43]]。

物部氏説

物部氏を原始祭祀氏族とする説によれば、タケミカヅチ・御霊剣・石上神宮の関係から、タケミカヅチは物部氏が奉じた神とされる^[23]]。この中で、5世紀から6世紀頃に物部氏はツツノミタマを奉じて各地に遠征したといい、6世紀に発生した武蔵国造の乱と東国の鎮守設定の要請が合致すると説明される^[23]]。

また、鹿島神宮の祭神は古くよりタケミカヅチとされているが、『古事記』・『日本書紀』・『常陸国風土記』には祭神をタケミカヅチとする直接的な言及はなく、初見は『古語拾遺』（807年成立）または『延喜式』所収の「春日祭祀詞」（768年から927年に成立）にまで下る（「祭神」節）。その祭神設定の経緯としては、ヤマト政権が東国経営を進めるに伴い、原始祭祀の神に対して中臣氏がタケミカヅチを代位したという見方がなされている^{[129]]^[14]]}。一方、上記のようにタケミカヅチは物部氏の祀る神という見方や^[23]]、鹿島に残る「ミカ = 甕」伝承と神名との指摘もある^[10]]。いずれにしても、タケミカヅチが常陸に根付いたのは、8世紀をそう遡らないと見られている^[130]]。

そのほか、香取神宮祭神の「イハヒムシ（イワイムシ、伊波比主・斎主）」という別称から、鹿島・香取両神宮について「鹿島 = 朝廷の神」に対する「香取 = 在地の神（奉仕する神）」という、伊勢神宮の内宮・外宮に似た祭祀関係の指摘もある^{[118]]^[23]]}。

現地情報

所在地

- 茨城県鹿嶋市宮中2306-1

付属施設

- 宝物館 - 開館時間：午前9時から午後4時。直刀（国宝）等の宝物を展示。

交通アクセス

- 鉄道
 - JR東日本鹿島線 鹿島神宮駅（徒歩10分） - 鹿島臨海鉄道大洗鹿島線も乗り入れ。
- 高速バス
 - 東京駅から、高速バスかしま号で「鹿島神宮」バス下車
- 車
 - 東関東自動車道 潮来ICから、国道51号を鹿嶋方面へ約20分
 - 駐車場：鹿島神宮第1・第2駐車場（有料）のほか、市営駐車場（有料）が鹿島神宮駅周辺に点在

周辺

- 鹿島城山公園
 - 鹿島城址
- 塚原ト伝墓

脚注

注釈

- ↑ ^{*a b*} 春日社創建の正確な年号は明らかではない、「神護景雲2年」は春日大社の社記に基づくもので、『日本三代実録』元慶8年8月26日条を支証とする（『国史大辞典』春日大社項）。
- ↑ 平安時代以前、「神宮」の呼称使用の他例には『古事記』『日本書紀』で「石上神宮」があるが、『延喜式』神名帳では「石上坐布留御魂神社」と記される（岡田精司 2011年）。
- ↑ 「一宮」の初見は建暦3年（1213年）（一宮制 2000年、p. 230）。
- ↑ 「日本三大楼門」は、鹿島神宮のほか阿蘇神社（熊本県阿蘇市）、宮崎宮（福岡県福岡市）の楼門とされる。
- ↑ 昭和29年9月17日付けで「鹿島神宮本殿」と「鹿島神宮拝殿、幣殿、石の間」の2件の重要文化財を統合し、「鹿島神宮4棟」とした。参照：『国宝・重要文化財建造物官報告示』、文化財建造物保存技術協会、1996;『国宝・重要文化財建造物目録』、第一法規、1990

原典

- ↑ ^{*a b c d e f g h i j k l m n o p*} 『常陸国風土記』香島郡条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ 『続日本紀』養老7年（723年）11月丁丑（16日）条。
- ↑ 『先代旧事本紀』『国造本紀』仲国造条。
- ↑ ^{*a b*} 『常陸国風土記』行方郡条。
- ↑ 『肥前国風土記』杵島郡条。
- ↑ 『古事記』神代記。
- ↑ 『日本書紀』神代記。
- ↑ 『古語拾遺』（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ 『延喜式』巻8 祝詞 春日祭条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ 『梁塵秘抄』巻2 四句神歌。
- ↑ 『令集解』巻16 選叙令 同司主典条・不得用三等以上親令釈。
- ↑ ^{*a b*} 『延喜式』巻18 式部上 郡司条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ 『常陸国風土記』久慈郡条。
- ↑ 『大鏡』下 藤原氏物語。
- ↑ ^{*a b c*} 『日本三代実録』貞観8年（866年）正月20日条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ ^{*a b c*} 『延喜式』神名帳 陸奥国条。
- ↑ ^{*a b*} 『続日本紀』宝龜8年（777年）7月乙丑（16日）条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ ^{*a b*} 『続日本後紀』承和3年（836年）5月丁未（9日）（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ ^{*a b*} 『続日本後紀』承和6年（839年）10月丁丑（29日）条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ ^{*a b*} 『日本文徳天皇実録』嘉祥3年（850年）9月己丑（15日）条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ 『延喜式』神名帳 常陸国条。
- ↑ 延暦元年（782年）5月壬寅（20日）条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ 『続日本紀』天平18年（746年）3月丙子（24日）条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ 『延喜式』巻15 内蔵 鹿島香取条（神道・神社史料集成参照）。
- ↑ 『延喜式』巻3 臨時祭 神宮司季禰条（神道・神社史料集成参照）。

- ↑ 『続日本紀』天平宝字2年(758年)9月丁丑(8日)条(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ *『新抄格勅符抄』*10 神事諸家封戸 大同元年(806年)牒(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ 『続日本紀』神護景雲元年(767年)4月庚子(21日)条(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ 『続日本紀』宝龜4年(773年)6月丙午(2日)条(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ 『続日本紀』宝龜11年(780年)12月壬子(22日)条(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ 『日本後紀』弘仁3年(812年)6月辛卯(5日)条(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ 『延喜式』巻3 臨時祭 神社修理条(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ 『吾妻鏡』仁治2年(1241年)2月12日条。
- ↑ 『吾妻鏡』建久2年(1191年)12月26日条。
- ↑ 『類聚三代格』2 年分度者事 嘉祥3年(850年)8月5日官符(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ 『類聚三代格』3 定額寺事 天安3年(859年)2月16日官符(神道・神社史料集成参照)。
- ↑ 『万葉集』巻20 4370番 ([1] (http://infux03.inf.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~manyou/ver2_2/manyou_kekka2.php?kekka=20/4370)(万葉集検索システム<山口大学>)参照)。

出典

- ↑ 東国三社 (http://www.kamisu-kanko.jp/power/) (神栖市観光協会)。
- ↑ *鹿島郡* (平凡社) 1982年。
- ↑ *鹿島郡* (角川) 1983年。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 14。
- ↑ *鹿園* (鹿島神宮 公式サイト)。
- ↑ 神社由緒書。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 8。
- ↑ 建御雷神 (国史) 1988年。
- ↑ 東実 2000年, p. 48。
- ↑ *鹿島神宮* (神々) 1984年。
- ↑ *鹿島神宮* (角川) 1983年。
- ↑ 一宮制 2000年, p. 230。
- ↑ 書き下し文は『新編日本古典文学全集 5 風土記』小学館、2003年(ジャパンナレッジ版)、pp. 389-390による。
- ↑ *鹿島神宮* (平凡社) 1982年。
- ↑ 藤沢彰 1994年。
- ↑ 久信田喜一 2014年。
- ↑ 松前健『日本神話の謎がよく分かる本』大和書房、2007年、pp. 126-129。
- ↑ 西垣晴次「鹿島神宮」(『世界大百科事典』平凡社)。
- ↑ 松前健「建御雷神」(『国史大辞典』吉川弘文館)。
- ↑ 神社本庁監修『神社のいろは』(扶桑社) p. 76。
- ↑ 山本博文監修『あなたの知らない千葉県の歴史』(洋泉社)Q5 (pp. 26-27)。
- ↑ 本宮 (鹿島神宮 公式サイト)。
- ↑ *鹿島神宮* 岡田精司 2011年。
- ↑ 東実 2000年, p. 135。
- ↑ 稲垣栄三「春日大社」(『国史大辞典』吉川弘文館)。
- ↑ *鹿嶋神宮* (式内社) 1976年。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 9。
- ↑ *鹿島御児神社* (国史) 1983年。
- ↑ *奈良県の地名* (平凡社) 春日大社項。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 153。
- ↑ “天然記念物 境内の杉使った伝統の木製 震災3年 鹿島神宮大鳥居が復活 きょう竣工 祭司「森守った先祖と神に感謝」”。*東京新報*。p. 24。 (2014年6月1日)
- ↑ *鹿島神宮境内 附 郡家跡* (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=401&item_id=449) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 鹿島神宮境内附郡家跡 (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/shiseki/12-20/12-20.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ “華麗なる静と動 来月1、2日 秋の祭典 古式ゆかしく平安絵巻”。*茨城新報*。p. 16。 (2013年8月29日)
- ↑ *2011.3.11 東日本大震災の記録* (http://city.kashima.ibaraki.jp/info/detail.php?no=5792)。鹿嶋市、(2012-6)、p. 3 2014年7月23日閲覧。
- ↑ 2012年発掘調査報告書。
- ↑ 神道・神社史料集成。
- ↑ 香取神宮 (http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/190101.html) (國學院大學21世紀COEプログラム「神道・神社史料集成」)。
- ↑ 東実 2000年, p. 125。
- ↑ 東実 2000年, p. 142。
- ↑ *鹿島氏* (国史) 1983年。
- ↑ 東実 2000年, p. 205。
- ↑ *社領* (国史) 1983年。
- ↑ *大生神社* (神々) 1984年。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 94。
- ↑ *鹿島神宮* (国史) 1983年。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 80。
- ↑ *鹿島神宮樹叢* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/tennen/14-28/14-28.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ 東実 2000年, p. 26。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 21。
- ↑ *鹿島神宮 > 本殿* (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=102&item_id=249) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 鹿島神宮 > 石の間 (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=102&item_id=250) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 鹿島神宮 > 幣殿 (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=102&item_id=251) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 鹿島神宮 > 拝殿 (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=102&item_id=252) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 鹿島神宮本殿・拝殿・弊殿・石の間の(附棟札2枚) (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/kenzou/1-1/1-1.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ 東実 2000年, p. 27。
- ↑ *鹿島物忌* (国史) 1983年。
- ↑ *鹿島神宮仮殿* (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=102&item_id=255) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 鹿島神宮仮殿 (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/kenzou/1-23/1-23.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *鹿島神宮楼門* (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=102&item_id=254) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 鹿島神宮楼門 (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/kenzou/1-12/1-12.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ “鹿島鳥居 (http://kotobank.jp/word/鹿島鳥居)”。*デジタル大辞泉*。2014年7月23日閲覧。
- ↑ 大鳥居竣工祭のお知らせ (鹿島神宮 公式サイト)。
- ↑ *東実 2000年*, p. 191。
- ↑ 要石 (鹿島神宮 公式サイト)。
- ↑ 阿部安成 (2004-3)，“第3章 地震と人びとの想像力”(http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1855-ansei-eduJSHIN/index.html), in 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会、*災害教訓の継承に関する専門調査会報告書*, 内閣府, p. 135 2014年7月23日閲覧。
- ↑ 流澤龍彦『幻想博物学』(「黄金時代」所収、薔薇十字社、1971年7月)。
- ↑ 香取神宮社務所編『新修 香取神宮小史』(香取神宮社務所、1995年)p. 63。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 18。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 19。
- ↑ 東実 2000年, p. 21。
- ↑ 『デジタル版 日本人名大辞典+Plus』天迦久神項 (http://kotobank.jp/word/%E5%A4%A9%E8%BF%A6%E4%B9%85%E7%A5%9E)(コトバンク<朝日新聞社>より)。
- ↑ 東実 2000年, p. 147-149。
- ↑ 東実 2000年, p. 149。
- ↑ *一の鳥居* (鹿島神宮 公式サイト)。
- ↑ 『茨城県の地名』(平凡社) 大船津村項。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 53-54。
- ↑ 摂末社は『新鹿島神宮誌』第3章 (pp. 52-68)による。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 52。
- ↑ *鹿島神宮摂社奥宮本殿* (附棟札1枚) (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/kenzou/1-2/1-2.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 57。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 58。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 59。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 54-55。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 55。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 136。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 54。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 56。
- ↑ 肥後和男「息栖神社」(『国史大辞典』吉川弘文館)。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 61。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 68。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 46。
- ↑ 上野貞文 2002。
- ↑ *式年大祭* (鹿島神宮 公式サイト)。
- ↑ 鹿島御船祭 (国史) 1983年。
- ↑ 年間祭事節は鹿島神宮の公式サイト年中行事 (鹿島神宮 公式サイト)ならびに、神宮誌 2004年, p. 28-50に基づく。
- ↑ *神宮誌 2004年*, p. 29-32。
- ↑ *鹿島の祭頭祭* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/mingei/17-6/17-6.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ 東実 2000年, p. 109。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 70。
- ↑ 東実 2000年, p. 108。
- ↑ *直刀／黒漆平文大刀拵* (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=201&item_id=467) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 直刀 黒漆平文大刀拵 (附刀唐櫃1合) (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/kougei/4-1/4-1.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ 大場磐雄「石上神宮」(『国史大辞典』吉川弘文館)。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 70-72。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 72。
- ↑ 神宮誌 2004年, p. 148。
- ↑ *鹿島神宮摂社奥宮本殿* (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=102&item_id=253) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 神宮誌 2004年, p. 73。
- ↑ *梅竹蒔絵鞍* (http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=201&item_id=5891) - 国指定文化財等データベース (文化庁) 梅竹蒔絵鞍 (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/kuni/kougei/4-9/4-9.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *木造狛犬* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/tyokoku/3-24/3-24.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *木造狛犬* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/tyokoku/3-52/3-52.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *黒漆螺鈿蒔絵台* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-23/4-23.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *銅印* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-24/4-24.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *陶製狛犬* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-25/4-25.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *石灯笼* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-26/4-26.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *鐙* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-27/4-27.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *軍配* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-28/4-28.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *太刀* (銘 景安) (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-34/4-34.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *草花双鳥円鏡* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-63/4-63.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *十一面観音御正体* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/kougei/4-64/4-64.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ *鹿島神宮文書* (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/komon/6-6/6-6.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ 鹿島神宮境内附郡家跡「神野向遺跡」 (http://www.hitachifudoki1300.jp/visit/04/index.html) (常陸国風土記1300年記念<茨城県生活環境部生活文化課>)。
- ↑ 和田文夫「鹿島御子神社」『日本の神々 -神社と聖地- 12 東北・北海道』谷川健一編、白水社、1984年、p. 31。
- ↑ 「香取神宮#香取苗裔神」参照。
- ↑ *香取神宮* (神々) 1984年。
- ↑ *東実 2000年*, p. 192-193。
- ↑ *鹿島神宮寺* (国史) 1983年。
- ↑ 『デジタル大辞典』鹿島立ち項等 (http://kotobank.jp/word/%E9%B9%BF%E5%B3%B6%E7%A5%8B%E3%81%A1) (コトバンク<朝日新聞社>より)。
- ↑ *鹿島使* (国史) 1983年。
- ↑ 東実 2000年, p. 85。

- ↑ **abc** 夫婦塚古墳史跡説明板。
- ↑ 『茨城県の地名』(平凡社)宮中野古墳群項。
- ↑ 東実 2000年, p. 92.
- ↑ 『茨城県の地名』(平凡社)大生神社項。

- ↑ 大生古墳群 (http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/shiseki/12-50/12-50.html) (茨城県教育委員会)。
- ↑ 鹿島大神(国史) 1983年.
- ↑ 瀧音能之編『風土記謎解き散歩』(新人物文庫)pp. 124-125。

参考文献・サイト

- 神社由緒書
- 境内説明板

史料

- 『常陸国風土記』香島郡条ほか
 - 神道・神社史料集成参照。
 - 武田祐吉編『風土記』(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1173165/27) (岩波書店、1937年、国立国会図書館デジタルコレクション) 27-43コマ参照 (香島郡は36-39コマ)。
- 『鹿島宮社例伝記』、『鹿島宮年中行事』
 - 『鹿島宮社例伝記』は鎌倉時代、『鹿島宮年中行事』は室町時代。
 - 両書とも塙保已一編『続群書類従 第3輯ノ下 神祇部』(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/936498/30) (続群書類従完成会、1924年-1926年、国立国会図書館デジタルコレクション) 30-41コマ参照。

書籍

- 鹿島神宮発行書籍
 - 『新鹿島神宮誌 改訂版』鹿島神宮社務所編、鹿島神宮社務所、2004年。
- 百科事典
 - 『国史大辞典 第3巻』吉川弘文館、1983年。ISBN 464200503X。
 - 萩原竜夫「鹿島御船祭」、萩原竜夫「鹿島氏」、萩原竜夫「鹿島神宮」(網野善彦「社領」、萩原竜夫「鹿島神宮寺」、萩原竜夫「鹿島信仰」、萩原竜夫「鹿島使」、萩原竜夫「鹿島大神」、萩原竜夫「鹿島事蝕」、渡辺直彦「鹿島総追捕使」、萩原竜夫「鹿島物忌」、肥後和男「鹿島御児神社」。
 - 『国史大辞典 第9巻』吉川弘文館、1988年。ISBN 4642005099。
 - 松前健「建御雷神」。
 - 『日本歴史地名大系 8 茨城県の地名』平凡社、1982年。ISBN 4582490085。
 - 「鹿島郡」、「鹿島神宮」。
 - 『角川日本地名大辞典 8 茨城県』角川書店、1983年。ISBN 4040010809。
 - 「鹿島郡」、「鹿島神宮」。
- その他書籍
 - 沼部春友「鹿嶋神宮」『式内社調査報告 第11巻』式内社研究会編、皇學館大学出版部、1976年。
 - 『日本の神々 -神社と聖地- 11 関東』谷川健一編、白水社、1984年。ISBN 4560025118。
 - 大和岩雄「香取神宮」、大和岩雄「鹿島神宮」、大和岩雄「大生神社」。
 - 東実『鹿島神宮 改訂版』学生社、2000年。ISBN 4311407173。 - 著者は元宮司。
 - 『中世諸国一宮制の基礎的研究』中世諸国一宮制研究会編、岩田書院、2000年。ISBN 978-4872941708。
 - 岡田精司「6 東国の鎮守 <鹿島・香取神宮>」『新編 神社の古代史』学生社、2011年。ISBN 4311203022。
 - 『国史跡鹿島神宮境内附郡家跡・鹿島神宮祈禱殿・社務所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-(鹿嶋市の文化財 第144集)』鹿嶋市文化スポーツ振興事業団、2012年。
 - 久信田喜一「鹿島神宮」『神社の古代史 (新人物文庫)』『歴史読本』編集部編、中経出版、2014年。ISBN 978-4046001368。

論文

- 藤沢彰「鹿島神宮の祭儀と空間構成について」、『日本建築学会計画系論文集』第59巻、社団法人日本建築学会、1994年5月30日、209-210頁、NAID 110004653757 (http://ci.nii.ac.jp/naid/110004653757)。
- 上野貞文「鹿島神宮　御船祭 (http://www.girei.jp/news/h14news.htm#127)」、『儀礼文化ニュース』第127巻、儀礼文化学会、2002年9月、2014年3月2日閲覧。

サイト

- 鹿島神宮。 “常陸国一之宮　鹿島神宮 (http://www.kashimajingu.jp/wp/)”。 2014年6月17日閲覧。
 - 一の鳥居 (http://www.kashimajingu.jp/wp/keidai/keidai01)、本宮 (http://www.kashimajingu.jp/wp/keidai/keidai03)、鹿園 (http://www.kashimajingu.jp/wp/keidai/keidai06)、要石 (http://www.kashimajingu.jp/wp/keidai/keidai08)、年中行事 (http://www.kashimajingu.jp/wp/event/event01)、平成二十六年　式年大祭御船祭奉賛のお願い (http://www.kashimajingu.jp/wp/904.html)、大鳥居竣工祭のお知らせ (http://www.kashimajingu.jp/wp/1316.html)
- “鹿島神宮(常陸国鹿島郡) (http://21coc.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/200101.html)”。 國學院大學21世紀COEプログラム「神道・神社史料集成」. 2014年1月25日閲覧。

関連文献

- 北条時鄰『鹿島志』1823年。
- 『古事類苑』神宮司庁編、鹿島神宮項。
 - 『古事類苑 第9冊』(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1873551/288) (国立国会図書館デジタルコレクション) 288-313コマ参照。
- 『鹿島神宮誌』岡泰雄編、鹿島神宮社務所、1933年。

関連項目

- 国宝一覧
- 鹿島神社
- 鹿島氏
- 鹿島神流
- 新当流
- 鹿島踊り
- 鹿嶋市立中央図書館 - 敷地の一部を貸与

神宮に由来

- 鹿島 (戦艦)
- 鹿島 (練習巡洋艦)
- かしま (練習艦)

神宮の鹿に由来

- 鹿島アントラーズ - チーム名及びマスコットキャラクターは、神宮の鹿にちなむものである。

外部リンク

- 常陸国一之宮 鹿島神宮 (http://kashimajingu.jp/) - 公式サイト
- 鹿島神宮 (http://www.sopia.or.jp/kashima-kanko/jingu.html) - 鹿嶋市観光協会
- 鹿島神宮 (http://www.ibarakiguide.jp/db_kanko/?detail&id=0800000000093) - 茨城県観光物産協会「観光いばらき」
- 鹿島神宮 (http://www.oyashiro.or.jp/link/0017.html) - 茨城県神社庁
- 鹿島神宮 (http://21coc.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/200101.html) - 國學院大學21世紀COEプログラム「神道・神社史料集成」



かしま(海上自衛隊練習艦)

艦名は神宮に由来する。

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=鹿島神宮&oldid=62705992>」から取得

カテゴリ: [茨城県の神社](#) | [鹿嶋市の歴史](#) | [鹿嶋市の建築物](#) | [名神大社](#) | [常陸国の式内社](#) | [一宮](#) | [官幣大社](#) | [勅祭社](#) | [別表神社](#) | [日本の国宝 \(工芸品\)](#) | [茨城県の重要文化財](#) | [茨城県にある国指定の史跡](#) | [鹿島神社](#) | [アテルイ](#) | [常陸国](#) | [江戸時代の建築](#) | [中臣氏](#) | [藤原氏](#) | [茨城百景](#)

- 最終更新 2017年1月19日 (木) 15:06（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。
- テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。